

小田原城総構

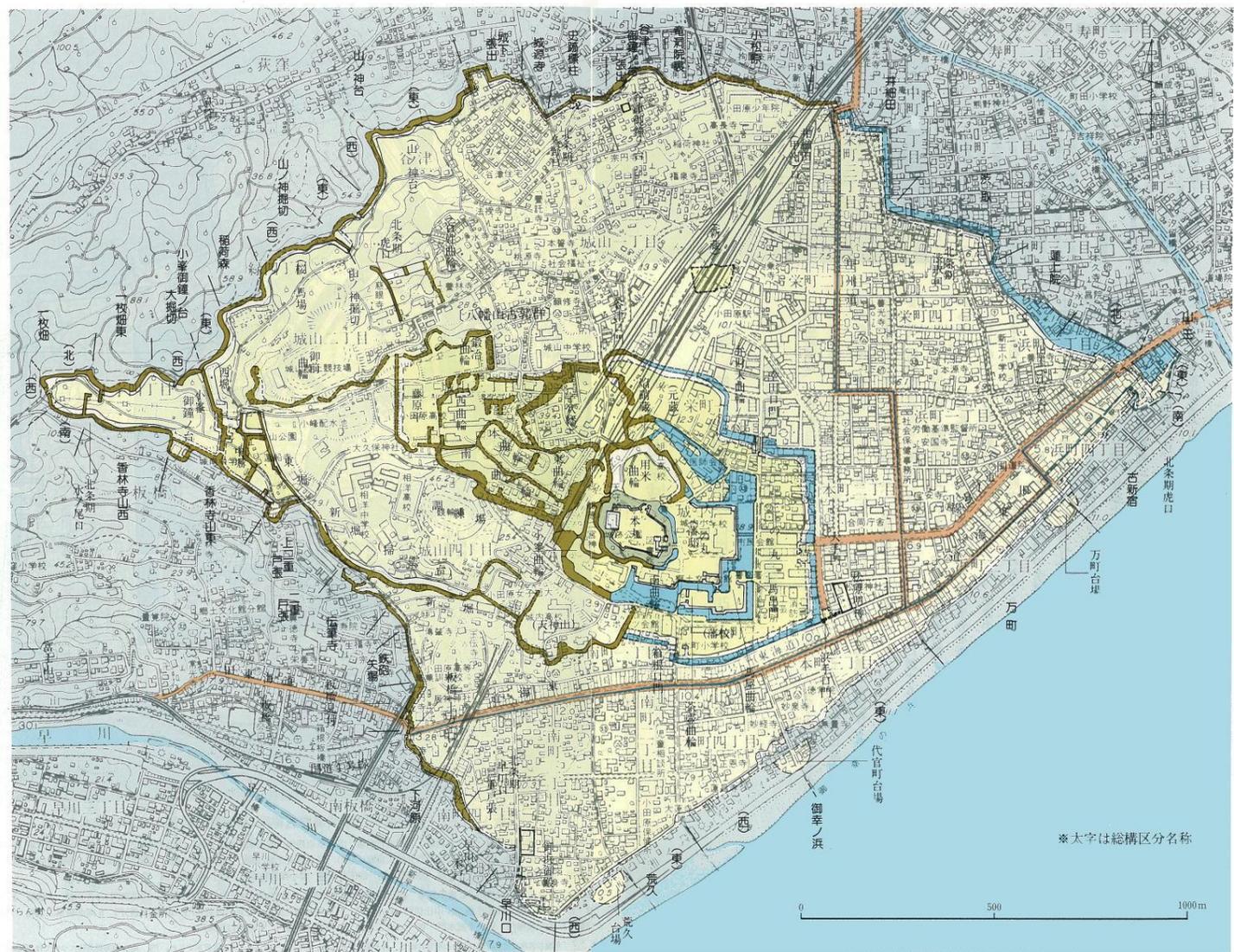


図1. 小田原城総構範囲の遺構図 『小田原市史 別編 城郭』小田原市教育委員会 1995
作図:小笠原清・山口隆・小田原城郭研究会

編集：小田原城郭研究会 山本篤志

小田原城総構（大外郭）

小田原城の起源

平安時代、小田原の早川流域に早川荘という荘園が存在していた。源頼朝の旗揚げに協力した土肥実平の息子遠平が恩賞として早川荘を与えられ、小早川を名乗った。後の戦国大名小早川氏の始祖となるが、小早川氏の居館が小田原の何処かに造られたと考えられる。しかし、小田原城の起源に繋がる確証はない。

小田原城の起源と知られるのは室町時代、戦国時代の直前に起った享徳の乱の時である。鎌倉公方に味方した大森安楽齋入道（頼春）・憲頼親子が康正二（一四五六）年に小田原城を築城したと鎌倉大草紙に記されており、以降、大森氏が小田原城を拠点としていた。

戦国大名小田原北条氏の時代

戦国時代に小田原に君臨したのが小田原北条氏（以下北条氏）である。通説では明応四（一四九五）年に北条早雲こと伊勢宗瑞が小田原城を手に入れたと言われてきたが、近年の研究では、少なくとも翌年明応五（一四九六）年から文亀元（一五〇一）年の間に小田原城を奪取していたと考えられている。嫡男の氏綱が小田原城主となり、宗瑞は晩年を伊豆韮山城にて過ごした。宗瑞の死後も氏綱は小田原城を本拠地として使用しており、以後も小田原城が北条氏の拠点になった。

小田原城を難攻不落の城として有名にしたのが三代氏康の時代である。永禄四（一五六一）年に上杉謙信、永禄十二（一五六九）年には武田信玄といった名立たる戦国大名が相次いで攻め寄せているが、何れも撥ね退けており、天下にその名を轟かせた。だが、武田信玄の来攻時では、城下町や嫡男の氏政の屋敷が焼かれ、小田原城も本丸のみ残して落城寸前のところまで追い込まれている。この経験から小田原城は防御力を高めるため更に拡張されていったと考えられ、全長九キロメートルの総構を築くに至る。

小田原城総構の登場

小田原城総構（大外郭）とは、北条氏が天正一八（一五九〇）年、豊臣秀吉の来攻に備え、城下町の範囲まで堀と土塁で囲んだ周囲九キロメートルにも及ぶ防衛ラインである。小田原城攻囲戦に総勢約十五万とも言われる大軍を投入した秀吉もこの巨城の前では力攻めを諦め持久戦へとシフトしたと考えられている。よって、秀吉は北条氏の降伏を促すことになり、同年七月六日、五代当主北条氏直が自らの命と引き換えに一族家臣、領民の助命を求め秀吉配下の武将滝川雄利の陣へ投降した。氏直は高野山へ追放、四代氏政とその弟氏照には切腹が言い渡され、五代百年続いた北条氏は小田原を去った。

城壁で都市を取り囲む例として、中国の万里の長城や都城、西洋諸国の城塞都市が見られるが、国内で総構の最古のものとして荒木村重の居城としても有名な岡城で確認されている。織田信長の岐阜城や安土城などにも総構があったが、小田原城総構が何よりも輝きを魅せるのは、実戦で約十五万の大軍を相手に互角に戦った実績があることである。

小田原合戦の後、小田原城総構に手を焼いた秀吉をはじめ配下の武将たちはこぞって自身の居城に総構を築いており、領国経営の拠点として城郭都市を形成していく。つまり、小田原城総構の存在は近世城郭都市の礎を築くことにつながり、明治維新後も各城下町は主要都市として発展、日本の経済を支えたのである。

一方、小田原では江戸時代に入ると小田原城総構の範囲を小田原府内（おだわらふない）、総構を府内構（ふないがまえ）と呼び、都市小田原の境界としてその範囲が使われ、明治維新後の小田原町も総構の範囲が基本となった。現代でも古い人の間では御府内という呼び方が残り、板橋の「箱根板橋駅」、風祭の「箱根病院」などの名称に板橋見附以西が小田原府外であったことが伺える。つまり、小田原とは総構の範囲「小田原城」の範囲を指すのであって、「小田原のルー」は「小田原城」が基本になるのである。

文章・山本篤志

参考文献・『小田原市史別編城郭』小田原市教育委員会 一九九五

(一) 『井細田口』と『竹の花広小路』

西方の箱根起源の丘陵が足柄平野に尽きようとする急崖の基部に、これまで迎ってきた渋取川をひきよせて、その間隙を利用して城門を構成するらしい。しかし現在は道路や鉄道に分断されて、旧状を窺い知る事を困難にしている。この門を出ると「寺町」で、西南方の入谷津に続き寺院の集合することで著しかった。そしてこれより北上する街道は、いわゆる「甲州街道」である。

竹の花町の北端の街道に沿った西側の部分にかなり広い長方形の一角があり、この付近を「竹の花広小路」という。現在のバス停の位置のことではない。古絵図にもこの長方形の部分を描くものがあるのでこれは井細田口に附属する勢溜りの機能が考えられる。江戸城下の多くの広小路が、戦略よりも火災時の類焼を阻止する目的で配置されているのと、区別して考える必要があると思われる。

(二) 竜洞院裏

電電公社ナンバー1住宅の北側の道路に西北から斜に交叉する道路があり、この道路敷がほぼ史跡指定地に相当するので、堀の位置はこの道路の北側、現在東西方向に五戸の人家が一行に建っている部分にあたる。地形は現在西隣の谷津御鐘ノ台東縁より十二メートルほど低くしかも完全に平坦となっているが、明治期の地形図によると以前はもちろん自然勾配を示していた。また、田中誠一氏によるとこの切削は昭和初頭ごろから始つたもので、同氏の御記憶によると当時の原形は凡例2の構造であつたらしい。

(三) 谷津御鐘ノ台張出

谷津御鐘ノ台の北端、小松原の西隣に位置する大形の張出である。本来御鐘ノ台張出と呼ぶべきであるが、小峯御鐘ノ台と混同をさけて右の仮称をつけた。台地の標高は約三六メートル西面及び北面は完全に削り去られて急崖を作り、東面にだけ堀の痕跡を示す位置がいか所ある。田中誠一氏の談によれば、堀はかつて竜洞院裏と同一レベルで続いており、現在の崖下の道の上空約九メートルの高さを走り、最後に削平された時期は五・六年前であるという。

(四) 史跡標柱東

前項の位置から遺構は斜面を急に上昇し、高度約八メートル余りをへだててこの地域に入る。全域の遺構の拡張による改変が認められ、田中誠一氏(八二才、小田原市荻窪三九四)によると、宅地造成の際に崩されたものではないという。

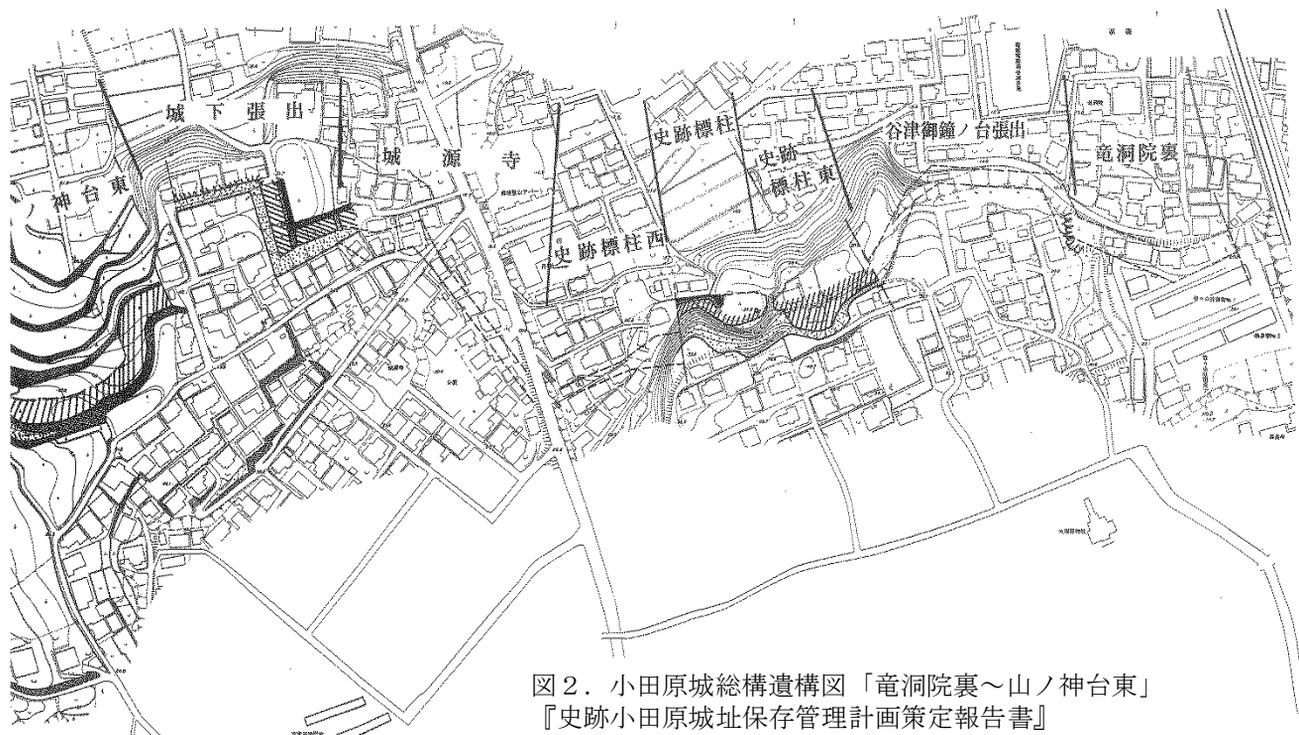


図2. 小田原城総構遺構図「竜洞院裏～山ノ神台東」
『史跡小田原城址保存管理計画策定報告書』
小田原市教育委員会 1975 作図 小田原城郭研究会

この地域のほぼ中央部は現況図でもかなり壁面が広いが、文久図はこの部分を堀と認めてかなり拡大して描いている。今後調査の必要な部分である。この部分は現況では内側が高く外側とは約一・五メートルほど低い。

(五) 史跡標柱

谷津御鐘ノ台西端の地域で、遺構の保存状態はよい。土塁・堀・搔き上げとも残るが、ただし搔き上げは東方がやや不明である。堀幅は約七メートル、土塁数は幅〇・八メートル、中央の湾入部付近での土塁高さは堀の表面より約二メートル。

(六) 史跡標柱西

この付近はいわゆる久野口に比定されるところだが、現況は前項と同じでほとんど開発されている。道路と直交する付近に大きな曲折があり、昭和十三年史跡指定の際の地籍図によって推定線を示した。これによると曲折は広角に外方へ開くが、しかし古城図類の多くはきわめて鋭角で、その状況は東方より著しく岩槻台方面に堀は寄るようになる。今後の検討が必要と思われる。

(七) 城源寺と城源寺縦堀

城源寺一帯は巨大な湾入地形で、地名を城下という。寺は山号花岳山で大森氏の居館が花岳または華嶺ついで小峯などと称したとする伝承もあり、小田原城の歴史に深く係わっていることが推定されるが、それを伝える史料は乏しい。

その城源寺の北側から、大外郭の空堀は突然急勾配を昇りはじめ、堀底の傾斜からまさに縦堀の状況で、これまで横堀ばかり見てきた目には意外なほどに映るであろう。これに匹敵する急斜面の空堀は他に一箇所西南部の板橋見附上段に存在したが、これは東海道新幹線の工事で消滅した。もちろんこの遺構は中世城郭の縦堀とは構成の目的やその手法において全く同一ではないが、北条氏時代小田原城のなかで、特に注意されてよい遺構である。

(八) 城下張出

小田原城外郭中最も北方へ突出する張出で、東西約五〇メートル、南北約四五メートルの長方形を示し、現在上部は宅地化されて平坦であるが、以前の地形図によると東側面のみ墨状に高くやや北西に傾斜した標高四〇メートルの台地である。小字名を城下という。

張出の東側は直角に東に曲折し、この付近の堀は張出の斜面を走らずに谷状地形の底部へ位置し、堀幅は明瞭で一〇メートル内外。東方へ進むにつれて低くついに切通しの道路へ出るが、この勾配は堀底に何回かの段差をくりかえしている。

張出北面は原形の土塁（城内壁）が削られて道路となり、堀の位置はその外側で、現在人家が一行に並んでいる部分に相当するようである。北面の全長は約一八メートル、人家背後に搔き上げの痕跡らしいものが認められる。

(九) 山ノ神台

山ノ神台突出部から東北部へほぼ直線に延びる部分で、総延長約一六〇メートル、突出部より東北へ一一〇メートルの地点で平面的に位置差を生じ、それより東方は堀幅分ほど外側へ移動する。二か所に崩落があり、一は突出部の外側、二はこれより位差までおよそ中間の位置だが、全体的に堀は明瞭である。

突出部には二か所に段違いがあり、その一は西高東低で段差一・五メートル、その二は東高西低で段差二メートル、この二か所の段違いによって突出部北側に大きな凹入がある。遺構は堀幅は七〜一〇メートルを測る。

(一〇) 荻窪口東縁部

山ノ神堀切より東方、荻窪側に降りる農道側をいう。小田原城関係図を時代順に検討すると、江戸時代でも終末に近い頃にはこの農道までを言う。小田原城関係図を時代順に検討すると、江戸時代でも終末に近い頃にはこの農道を荻窪口とするが、時代をさかのぼるにつれて荻窪口の位置は山ノ神堀切に近づく傾向が観察される。農道と大堀切とは直線距離にして約一〇五メートルの間隔にある。

(一一) 荻窪口（推定）とその西縁

これより西方へ続く桜ノ馬場と、東方山ノ神台地とをそれぞれ独立させる効果を持ち、西方入谷津側へ下る堀切とあわせて重要な遺構と考えられる。しかし、現況では堀切の規模はやや大きく、むしろ外郭に付属する遺構とみなすことが妥当で、恐らくここは『荻窪口虎口』の一部とみなすべきであろう。堀切は全長五〇メートル、堀幅は外郭に面する位置が最大で一メートル、中間部分では七メートルほどである。外角に接する付近で堀底より桜ノ馬場側とは高さ三メートルの比高があり、さらにその上に高さ一メートルの土塁らしいものが認められるので、合計四メートルほど低いだけで、この面は上部に土塁らしいものは存在してしない。付近はすべて蜜柑畑。

(一二) 稻荷森湾入堀
 東は山ノ神掘切西に続き、それよりほぼ直角に南方へ深く入り込み、鋭角に北西方向に抜ける長さ九〇メートルほどの急な湾入と、その西に現在堀底が蜜柑畑となつている二〇メートルほどの部分を合わせ、総延長一一〇メートルの区画である。

このうち湾入部は、全城孟宗竹の群棲中にあり、そのため堀の埋め戻しが行なわれず、小田原城外郭遺構中比類のない優秀な部分で、よく原形を残す貴重な遺構と考えられる。外郭については全く発掘調査が行なわれていない現在、この遺構の存在によつて外郭堀底の形態や規模ならびに残土の掻き上げ状態を知る事ばかりか、堀の埋没の過程でさえも知り得て、小田原城外郭の模式的な遺構として重要である。そこで筆者はこの湾入を「稻荷森湾入堀」と命名した。

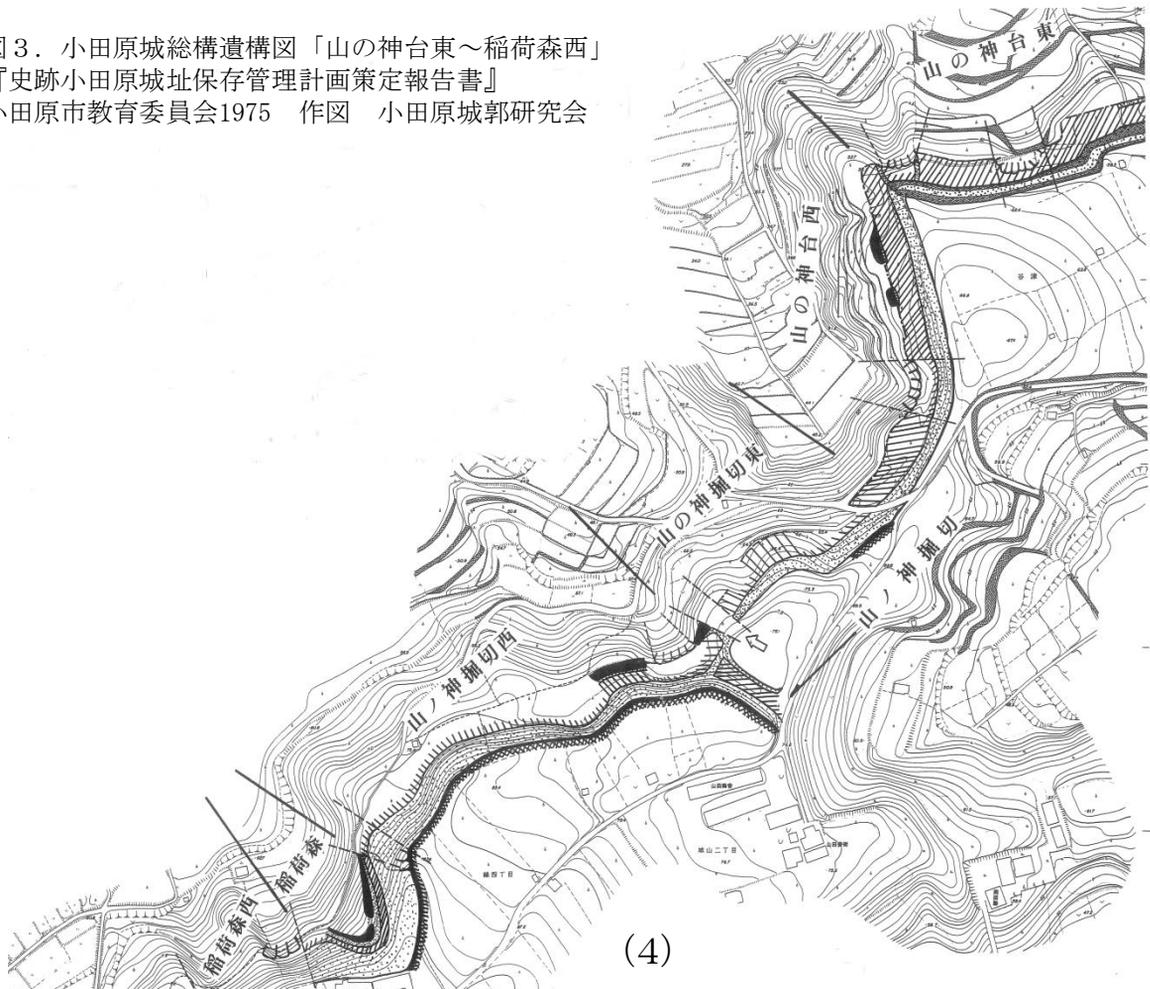
(一三) 小峯御鐘ノ台大掘切

小田原城遺構の中枢部は、東西方向に併行して走る三条の丘陵地によつてゐる。その通称を北から列記すれば、小松原から山ノ神台地・八幡山台地・天神山台地の順である。これら三方向からの丘陵の稜線はその西端に近い小峯御鐘ノ台付近で合流し、一条の尾根となつて西進して通称一枚畠で終わる。つまり、ここ小峯御鐘ノ台は小田原城遺構中枢部が、要害として占有する三条の稜線の扇の要の地形を示す。このような山中に、小田原城遺構の中でも類例の稀な、大規模な中世的遺構が集中する理由は、小田原城全域の立地を観察してはじめて理解される。

小峯御鐘ノ台は、標高一二〇メートルの台地にあり、丘陵の幅は最狭部を南北方向に測つて約四〇メートル内外である。この尾根をほぼ東西に二分して三条の大掘切りが存在し、三条ともほぼ南北方向に並行している。西方城外側より初列・次列・三列の順を、この報告書ではそれぞれ西堀・中堀・東堀と仮称した。本稿の記載の順序も西堀つまり城外側より内側へ及ぶようにした。東堀はその南端が『新堀遺構』に接続し、その北端は『御前曲輪』上段遺構立体的に接続している。堀の規模は最も大きく、城内側に依存する土塁も小田原城遺構の中で最大のものと認められる。位置的にも古期のもつと考えられる。

中堀は現在道路となつていて、東西両端とも開口してしまつたが、古城図類や公図などからみて本来は途中で終始していたものと思われ。いわゆる空堀の中では屈曲が多く規模は小さく、むしろ次の西堀付属する遺構と考えられるが詳細は今後の検討に待ちたい。

図3. 小田原城総構遺構図「山の神台東～稻荷森西」
 『史跡小田原城址保存管理計画策定報告書』
 小田原市教育委員会1975 作図 小田原城郭研究会



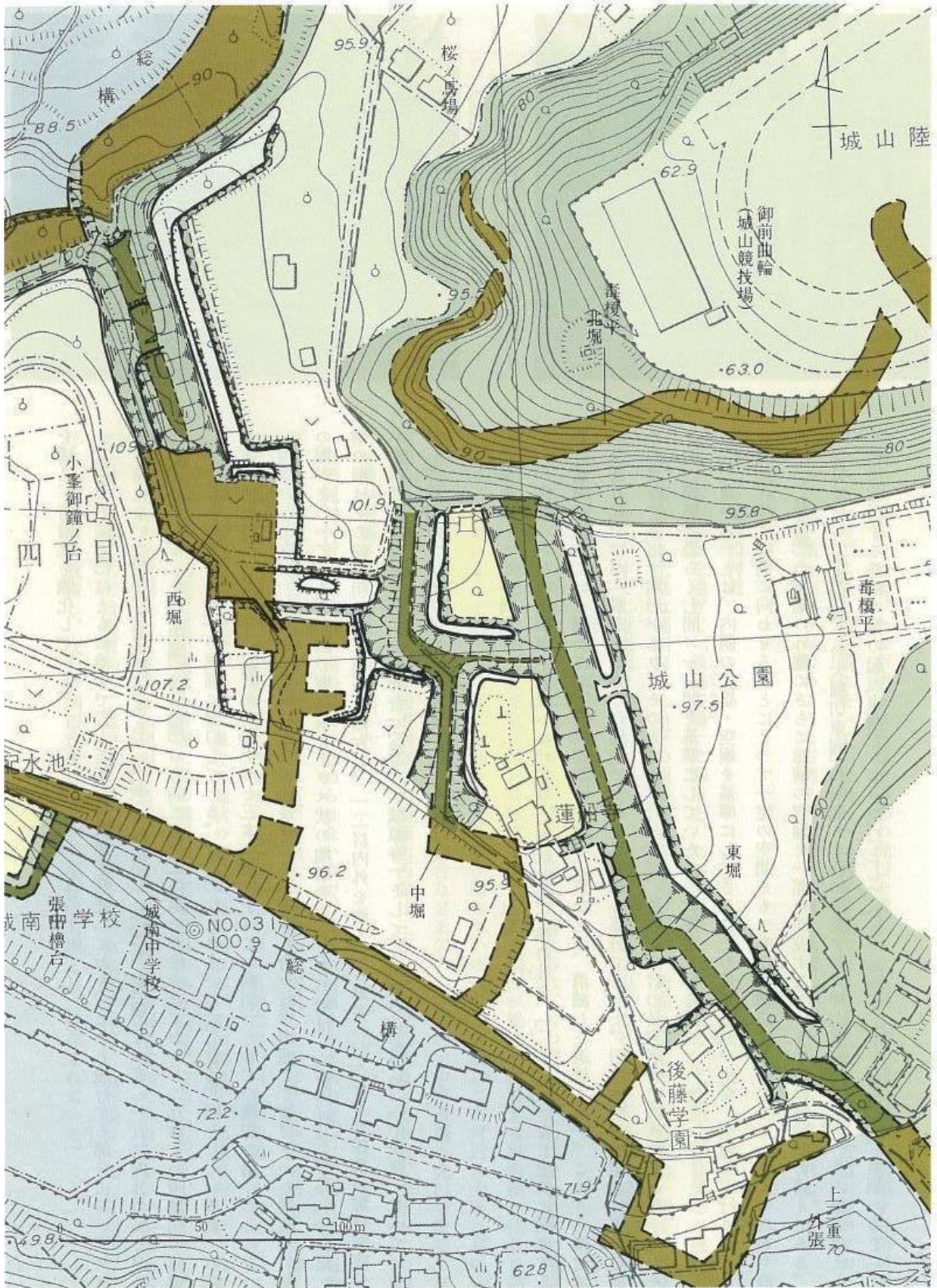


图4. 小峯御鐘ノ台大堀切東堀・中堀・西堀 『小田原市史 別編 城郭』
 小田原市教育委員会 1995 作図：小田原城郭研究会

西堀はその南端は外郭より派生した空堀と相対していたが、この部分は埋戻し・削平などにより現状が著しく改変されて現状では追跡できなくなった。堀の北端に外郭と接続する部分があつて、この西堀の底部は最も高く、ついで外郭西方よりの堀、さらに外郭東方からの堀と順次低く、つまり三段階の位差を示している。なおこの西堀はその中央部付近で二回屈曲をもち、これによつてもこの堀の成立時代のおよその上限を知る事が出来る。

(一四) 大掘切・東堀

小田原城三の丸西縁中堀に平行しながら南北に延びるが、南端は東南方向に一回屈曲して「新堀」の基点の一部をなしている。北端は埋没されてそこを道路が横断するが、この道路が完成する以前はこの北端部はさらに北側へ出てつまりほとんど掘切つていた。これより南方の屈曲点までの東堀延長は一六〇メートル、三条の御鐘ノ台掘切りの中でももつとも大形の遺構である。

東側は中堀との間に旧火葬場の台地があり、東側は堀に沿つて大形の土塁が平行している。高さ約二メートル(城内側よりの比高)、天端幅は約四メートル。保存状態はかなり良好である。なおこの北端の下段には「御前曲輪」があり、その西南部の湾入部の付近へほぼT字型に接続する。ほとんど絶壁に近いが高低差一五メートル(現地系)で、もちろん東堀が高位である。

(一五) 大掘切・中堀

西堀と東堀との中間に位置するのでこのように仮称する。現在は堀底が道路になり、さらに路傍に不燃物などが廃棄され景観上も面白くない、堀の両壁も戦後道路拡張の目的で開削され、現状を伝えると思われ部分と比較的に少ない。

堀の南北両端は掘りになつたため、完全に開口しているが、古城図類によるとその北端は東堀北端とほぼ同一線上で終止するのが基本形態であるように思われる。堀は底より五〇メートルほど南方に延び、ここに第一回の屈曲がある。これは直角ではなくむしろ「く」字型に近い。これは一五メートルで再び南方に折れ、これが第二回屈曲、さらに五〇メートルほど再び東へ折れるが、これが第三屈曲とするとこの第三回屈曲は全く痕跡的な状態でほとんどは道路工事のために消滅した。第二・第三回の屈曲ともやはり直角をなさず「く」字型である。

中堀には枝堀が付属するのも特色に思われる。第一回屈曲よりやや北に寄つて西方へ奥行四メートルの入り掘りがある。幅は現在拡大されて八メートルを測るが、もちろん原形とは思われない。次に第二回屈曲をそのまま東方へ進んでついに東堀の堀底へ達する枝堀があり、これは屈曲点よりの長さ三〇メートルを測る。きわめて狭い枝堀で周囲の掘切り遺構とは著しく規模が相違し、一見後の開削に疑われるが、しかし小田原城関係の古図類ではどの系統の図にも最初から表現されている。並列すると大堀とそれを結ぶ狭少な枝堀の例は、小田原城天守閣背後の現在遊園地付近にも存在した。この距つた両地域における構造上の著しい相似は注意されてもよいと考える。

(一六) 大掘切・西堀

現在では全長一五〇メートルくらいの範囲しか観察できないが、公図などによれば全長約二一五メートルくらいの距離で残存していたことが知られる。尾根筋を横断する位置にあり、掘切りの形態をなすため掘りの左右に明確な段差は無く、わずかに西高東低の現地形による高低差があるのみである。堀の東側には「小峰御鐘ノ台東」の土塁が続き、ここも原形を良く保存している。

規模は北端段違い部分から約一〇〇メートル程ほぼ直線状に南方へ走り、それより直角に東方へ折れて約一五メートル直進し、さらに再び南方へ直角に折れ、つまり二回屈曲を示す。これより先端までの一部埋没しているが、これは大部分戦後に受けた変更なので現状復帰が可能と考えられる。現在は屈曲点より約三五メートルほどが観察によつて追跡できる。堀幅は比較的保存状態が良い部分で堀底で測つて平均八・五メートル。これは外郭空堀のうち東方より接続してくるものの平均堀幅に等しい。西堀の北端は他に類をみないような残存状態のよい三方向からの段違い構造を示し、西堀は直接には東方よりの外郭空堀に接続している。現在接続部にコンクリート製土止石垣が施工されているが、この工事以前の観察では西堀と外郭東方よりの空堀との中央軸線はほぼ一致し、双方の堀底はほとんど直角に落差があり、その高低差は西堀の方が五メートル高かった。また西堀東側つまり城内側には土塁が存在し、これは外郭土塁に接続して「小峯御鐘ノ台東」方向に続く。右の三方向の段違い構造の付近ではきわめて保存状態がよく、重要な構造の一部とみなされている。

(一七) 小峯御鐘ノ台掘切西

御鐘ノ台大掘切より西方は小田原外郭遺構の最西端にあたり、またこの掘切の存在によって別郭を形成する。この独立郭の北側にほぼ東西方向に走る外郭遺構があり、そのうち大掘切西堀に接続する部分を標記のように仮称する。

堀の内外面全面にわたって蜜柑畑であるが、堀の内部のものは植栽されたのが最も遅いらしく、比較的樹齢は若い。大掘切りの段違い構造に近い付近では堀幅が広く一メートルを測るが、狭い部分では七、八・五メートルである。段違い構造より延長七五メートルの位置に農道が横断し、遺構はここでほぼ直角に北々西へ折れ、その位置をこの道路がそのまま走っている。したがって道路西縁に突出部が形成され、やや虎口の形態を思わせるがそれらしい遺構は検出されない。この付近の堀斜面は比較的残存状態が良く、西部もこれに準じて保存が良いが、しかし全面にわたりその上部に土墨の痕跡は見られない。

堀幅は農道西側の突出部をさらに西へ迂回する地点より、東方へ段違い構造付近まで明らかに認めることができ、東方へ行くほど深くなつて農道東方では深さ二メートルを測る。しかし突出部を迂回する付近では全く痕跡的でさらに西へ寄つては完全に消失し、地形は土墨(堀内壁)の根より自然勾配をなして山裾に向い、このように徹底的に破壊を受けている。

「大掘切東」の堀とは現況で二メートルの高底差をもつて接続する。その状態は大掘切西の堀底が約一〇メートルの堀幅を持ちながら、大掘切東の堀底へ落ち込み、その大掘切東の堀底へ御鐘ノ台初列の「西堀」が五メートル高底差で直角方向から落ち込み、この三方向からの堀底は一〇×八・五メートルの範囲でT字型に三又している。大掘切西よりの堀底が東堀に落ち込む法角は崩壊しているが、以前はほぼ直角に切り立っていたものと観察される。

(一八) 一枚畠東

一枚畠とは御鐘ノ台大掘切り西方の最高地点を呼ぶ小字名で、小田原城外郭の最西端でもある。標高一二三メートルの台地で、東方は大掘切西の外郭に接続し、西方は水ノ尾口、南方は香林寺山などの各外郭遺構により、ほぼ馬蹄形にかこまれている。ここではそのうち北側の遺構について、便宜上三分し、東部を一枚畠東、中央を一枚畠北、西部を一枚畠西と仮称した。



図5. 小田原城総構遺構図「小峯御鐘ノ台大掘切東～上二重戸張」
『史跡小田原城址保存管理計画の神策定報告書』
小田原市教育委員会1975 作図 小田原城郭研究会

このうち一枚畠東外郭は内方よりみると緩いW字形を示し、総延長約二一〇メートルにわたっている。東方の湾入部の下隅はほぼ直角に折れ、これに対して西方湾入部はごくゆるい円弧をなしている。なおこの円弧のほぼ中央部の斜面上に、それとは直角に内側へ入る不明な堀の痕跡が認められる。長さ幅とも不明で、現在堀の東側壁面が残存するだけであるが、松原図系の諸城図が虎口にみだてる堀の内側の一部であるらしく、その形態は公図によっても知ることができる。

さらに西端では現況において約一・五メートルほどの段差をもって堀は高くなり、平面的にも直角に折れて一枚畠北面の最も突出する部分すなわち一枚畠北へ移行する。全域に土塁は認められない。掻き上げは痕跡を残す部分もあるが全体に堀の埋め戻しが徹底している地域。堀幅は東方の大堀切西に接続する部分で九・二・九・五メートル、西方で一〇メートルを測ったが、いずれも痕跡をかるうじて測定した。

(一九)一枚畠北

ほぼ直線的に東西に延びる遺構である。一枚畠台地の直下にせまっています。堀の内壁は高くかつ勾配は急である。堀の延長は約一一〇メートル、東端段差から西へ約二五メートルほどの間は一〇〜一五メートルの幅をもって突出部を形成している。突出部西角直下の堀は平面的には六メートルほど内方へずれ、ここに二つ目の段差があつて西から落ち込む。さらに西端へ移つて一枚畠西へは三つ目の段差があり約三メートルほどの比高でこれは東から西へ落ちる。

堀幅はかなり明瞭で東端の段差付近では一メートルを測り、その外壁は高さ八〇センチ内外の堀縁が残り、さらにその外側には高さ二メートルほどの掻き上げも認められる。第二段差西隣の堀幅は一・二メートル、第三回段差東隣の堀もほぼ同じ幅で一・五メートル、またこの付近での堀の外縁の深さは二メートル余を測る。土塁の残存は全く認められない。

(二〇)一枚畠西

この台地の西側をいい、台地最高部よりやや西方外側へ降つたところに荻荻窪・水ノ尾へ降る山道が外郭を横断するので、古くからこの交叉点が「水ノ尾口」に比定されてきた。延宝図系の諸城図にその状況が記されているが、しかし城図も虎口の形態は示さず、また現在その遺構も虎口とは認められないほど混乱している。

一枚畠北より直角に西南方向へ折れる密柑畑があり、これは四周が高く畑全体が沈んでいるのでつまり一枚畠西の北端の堀遺構と推定され

る。長さ三メートル、幅は最狭部で一三メートルを測り、一枚畠北よりおよそ三メートル低い。

道路はこの畑の外側西方を北へ向つて荻窪側へ降るものと、この畑の南側を通つてやや西進してから同じく荻窪へ降る二本があり、現在西方へ直進する車道は最も新しく対象としないでおくと、古城図は諸系統のものがすべて後者を示している。たしかにこの道は降りかけて浸蝕が深く、いかにも古道の面影を示しはするものの、しかし外郭遺構からやや隔離し地形上にも遺構にも虎口の存在した形跡は認められない。あるいは前者の道を検討する必要があるかも知れない。

車道南部は崩壊と切削が著しく、遺構は全く確認できない。棚状に削平された耕地があり、これが遺構の存在した部分らしく、幅は車道沿いで一〇メートル、やや一枚畠南へ接近して八メートルを測った。全域に土塁も確認できないが、図示した堀遺構の位置より外側は掻き上げ部の残存形態である。

(二一)一枚畠南

前項に述べた棚状削平地の南端に堀の遺構が存在し、この付近より一枚畠の南面遺構を記述することになるので右のように仮称した。末端は一枚畠中央に向つて「外張虎口」形態の入り堀が存在する付近までをこのように呼ぶ。

堀幅は平均一〇メートルほどで崩壊のみられる別の場所では八メートルを測った。掻き上げはほとんど見られないが、この部分の最西端に近く高さ一・三メートルほどのものが残存している。土塁も入り堀を除いては全く確認できない。

東端の入り堀は松原図系各城下絵図が虎口形態を表現するものに相当し、北方一枚畠東よりの入り堀の外側をなし、双方から入り込んで平面的には虎口の姿を示すが、構造的にはかなり異様でその意義は明らかではない。双方堀底は共通して外郭堀底よりも高く、堀幅も外郭のそれより小規模で一枚畠南のものでは底部で約三メートル、両側に土塁があり、その間隔では六メートルを測る。外郭とは直角にほぼ直線入り込むが、その長さは三三メートルそれより直角に東へ折れて七メートルほど追跡できる。松原図系各図ではこの先端が隘路になる。延宝図系の諸図はこの形態を弧状にえがくがこれは遺構に即さない。最近では全体が極めて浅くなりその先端は埋戻されて不明となったが、これも最近の改変で原状復帰は充分可能な部分である。この堀は鍵折を持ち堀底が高く、しかも入り堀の両側に土塁の痕跡を残すなど、外張門の疑いが濃厚である。小田原城外郭虎口の解明のためにも保存を嚴重にして、将来の発掘調査に備えることが望ましい。

(二二) 香林寺山西

一枚畠の南側東方より小峯御鐘ノ台掘り切り西堀の南端までを、小字名にちなんで香林寺山とし、これをさらに二分して香林寺山西および香林寺山東と仮称する。

まず香林寺山西の部分は総延長約二四〇メートル、その東端は仮称香林山矢倉台址までとする。西端部入り堀より二〇メートルほど東方に段差があるが、残念ながら競輪場備付駐車場による削平工事の影響を受けて土砂が移動し、高低差その他詳細は観察できなくなっている。更に東部はほとんどが雑木林直下に堀があり、地形に従って次第に東方へ緩く傾斜し、東端は段差によって香林寺山東に接続している。土墨は全域に観察できない。

堀幅は一〇メートル内外で、現況は草地なども混在し北面の外郭帯より利用は激しくないのに、掻き上げの残存が意外に少く、以前現在よりも盛んな埋戻しが行なわれていたことを推定させる。西部密柑畑中に点在する掻き上げを認めるに過ぎない。特に東部では堀幅の確認は表面観察のみでは困難である。

(二三) 香林寺山東

香林寺山西との接続は約三メートルの段差を示し、これより地形に従って東方へ傾斜しながら御鐘ノ台大掘り切り南面の櫛歯状遺構を形成し、小田原城外郭中最も変化に富んだ複雑な遺構であったが、その大部分は城南中学校建設工事によって失なわれた。まず右の段差に直接接続して矢倉台址かと推定されるものが以前はあり、公図によると四周に空堀をめぐらせた長方形の突出部分である。延宝図系の諸図は、内側に堀を欠くのでやや矩形の張り出しとして表現し、さらに古い松原図系の各図はこの張出しを全く見落すかわりに、その基部に短かい入り堀を加えて虎口形態を示している。昭和十三年中山氏実測図は基本図として延宝図系定用いているらしく、梯形の張り出しは描くが内側の堀を見落している。

現況では香林寺山西の堀に直角に交わって前方へ突出する堀が四メートル、延長一四メートルほどみられ、その先端部付近から矢倉台址らしいものの相当する位置になるのが、現在は切崩されて遺構はない。右の堀の南端に堀を横断する土橋状の構造があり、その規模は敷幅二メートル、長さ六メートル、深さ八〇センチメートルほど認められる。矢倉台址内側の堀は崩壊により埋没しているが、東へ一五メートルほどから堀の残存がみいだされる。さらに三〇メートルほど堀は東方へ延びるが、城南中学校建設によって大部分を失い、校舎と校庭グラウンドとを結ぶ急な通路の中間より再び出現し、ほぼ直線状にゆるく東へ傾斜して進んでいるが、この延長は約一〇五メートルほどである。

しかしこの堀は堀底のほぼ正中線まで切削され、北側内壁を示すのみで、外壁や掻き上げを全く失っている。ただわずかに右の坂道の傍にはこの堀の原形が残り、これによって堀の形状が推定されると同時に、この付近外郭の模式的な意味からも貴重な残存部である。

(二四) 上二重外張

一枚畠の高地から小峯御鐘ノ台南部をほぼ等高線沿いに東進してきた外郭遺構は、小峯山乗越の付近で御鐘ノ台東堀の南端、つまり新堀遺構(後述)と合流する。内側に新堀があり外側におよぞ五〇メートルあまりの間隔で外郭の堀が並行し、これによっても御鐘ノ台以西の外郭は後の付加と認められ、御鐘ノ台西堀の三方向の段違い構造に対応する。

外郭と新堀との接合は、併行する二本の堀の間にそれらの堀とは直角にさらに本の横堀を入れ、つまり長方形の一郭を形成する構造である。そして古道はこうしてできた方形の郭内を貫通するので、横堀二本のそれぞれに外張構造を施せばここにも二重外張が形成されることになる。しかし従来二重外張口に比定されてきた位置はここより更に東方下段に相当するので、この報告書では、双方に疑いを残して、この位置を便宜上「上二重外張」と呼んでおく。

上二重外張の横堀のうち先端つまり下段の堀は完全に失なわれて、現在道路になった。上段の横堀もほとんど不明であるが、わずかにその一部が痕跡的に認められる。外郭側の遺構の位置は道路南側の人家とその背後に相当し、原形を知る手がかりは地籍図に頼るしかない。

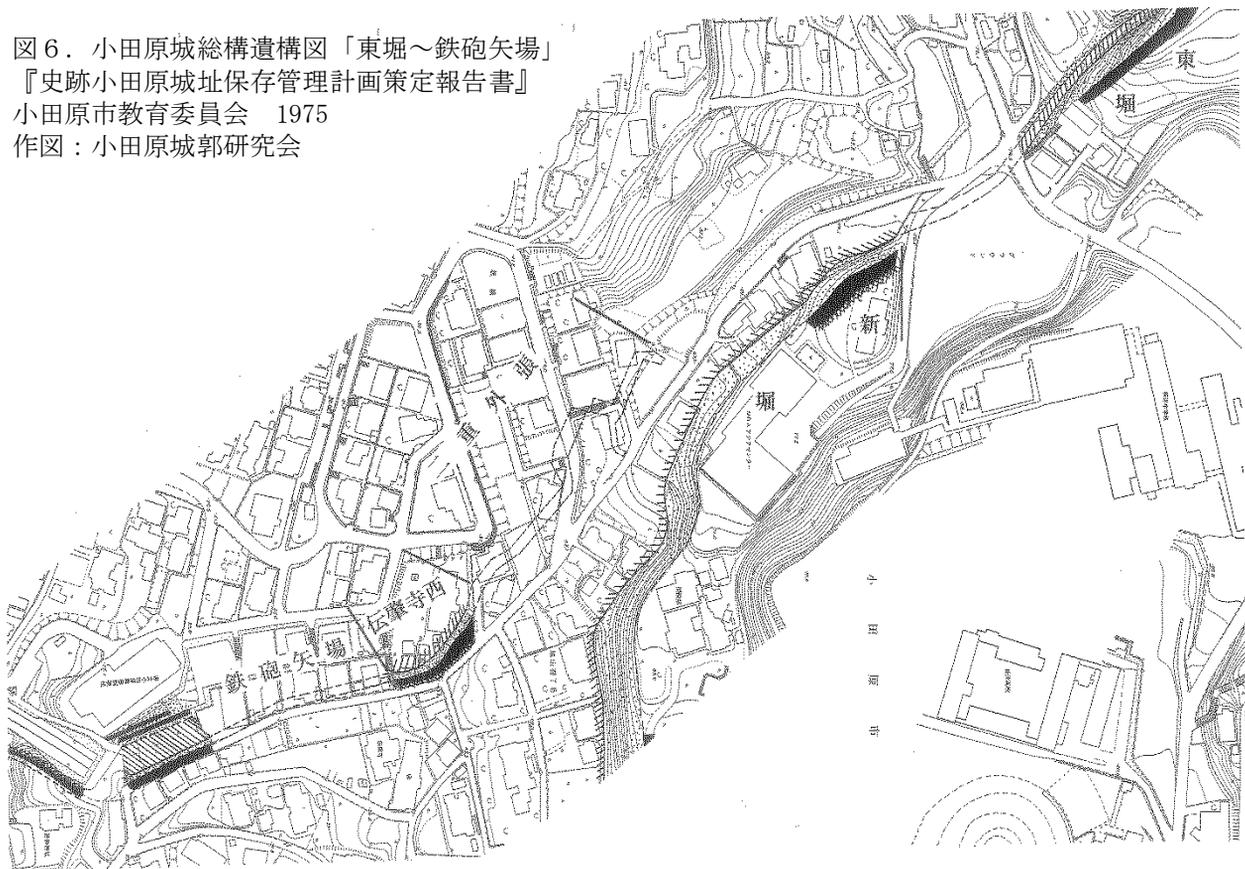
(二五) 三の丸外郭新堀土塁

小峯御鐘ノ台大掘切東堀の南端に起源し、小峯山・天神山の南面を東方に進んで、平地に移行しては三ノ丸総構を構成する遺構であるが、記載の便宜上これを更に細分し、ここで仮称する新堀とは天神山遺構西縁までとする。新堀の語は天正十五年の伝肇寺文書にその用例があるのでそれを踏襲した。

西より東へ記述すると、小峯山乗越部分は道路の交叉する位置で遺構を消失し、三の丸外郭新堀土塁入口付近から堀の内側土塁が残る。しかし堀底の規模は掻き上げの位置が残らないので判定が困難である。新堀より三井邸・閑院宮邸に達する部分まで、引続きこの状態で、閑院邸・新堀間の下段で地形なりに内壁は二回屈曲をみせる。この屈曲は文久図にもほぼ対応している。

伝肇寺背後東方より推定遺構位置は尾根の主軸に近づき、天神山掘切に近い部分に敷幅約三・五メートルの土塁らしいものが認められる。

図6. 小田原城総構遺構図「東堀～鉄砲矢場」
『史跡小田原城址保存管理計画策定報告書』
小田原市教育委員会 1975
作図：小田原城郭研究会



(二六) 二重外張

上二重外張よりおよそ一八〇メートル内外東方へ進んだ位置で、やはり外郭は新堀の外側に付加された形態ではじまり、これより早川河口まで小田原旧市街地の西縁を形成している。現在現場は分譲地となつて全く旧態を失ない、外張構造の東隣に一箇所堀底をのこすのみである。

城下絵図によると松原図系と延宝図系とは構造の表現が対立し、公図類ではこれら城下絵図ともまた異なつた形態をみせる。とりあえず松原図系では、新堀に対し直角に二又のある低平なY字型の堀が描かれるが、公図ではこのY字型はそれほど低平でない。松原図系ではこのY字型の中に狭長な一郭が認められるが、公図は半円形の一郭になる。延宝図形の諸図はY字型をなさず外郭は二又しない。分譲地化される以前の地形図によるとこのY字の内部はかなり比高の高い舌状地で幅もひろく、したがって公図は最も忠実に原形を示しているように思われる。この報告書の図は推定線を公図によつて仮りに示した。

(二七) 伝慶寺西

土地開発以前には堀の内側の高さ六メートル、長さ五メートルほどが残存する部分があった。土地開発時に行われた発掘調査にて、堀幅は最大級の規模の堀が出現した。また、堀底には高さ一・七メートルの堀障子も検出されている。本城小田原城からは天神山丘陵沿いに大きく西側に配されるこの地域は箱根から相模湾まで一望できる地域でもある。さらに、西には豊臣秀吉の本営石垣山城や細川忠興の陣場も見られ、西からの脅威に対する防衛として、開戦以前より警戒していたことが伺われる。天然の要害として西に早川が流れることも総構が天神山沿いに築かれる利点として挙げられるだろう。

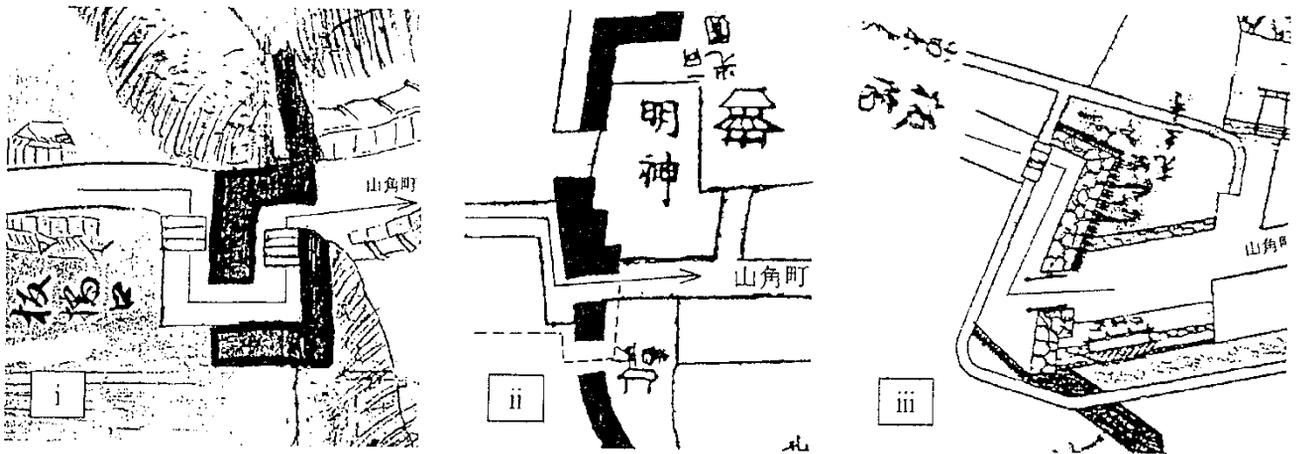
(二八) 鉄砲矢場

小田原城西側外郭では山地の斜面を走る部分から平地へ後行する接点で、構成上重要な位置にあるが全体に破壊が進み、特に東端は新幹線の開通工事によつて全く切断された。

通称「鉄砲矢場」は掻き上げも比較的明瞭で、長さ約一三メートルにわたつてほぼ遺構が追跡できる。内側より記すと土塁の幅四メートル、高さ二・五メートル、堀幅一六メートル、外側の掻き上げは敷幅二メートル、高さ二メートルなどを測った。なお犬走りとも思われる段が二・四メートルの幅にわたつて認められるが、まだ犬走りと確言はできない。なおこの堀の深さは墓地建設当時平均一間ほど埋戻したと言われる。



写真1. 伝肇寺西より出土した総構の堀 (写真提供：小田原市文化財課)



江戸時代の小田原城下「上方口」(板橋見附)の変遷

i：加藤図／大外郭の一部を割って作られた「上方口」。2度石段を登って城下に入る。／ii：田辺図／稲葉氏時代にiの北側に見附地形を整備(…は前期大久保氏時代のルート)。／iii：嘉永図／江戸時代末期の木戸門と番所

図7. 板橋見附の変遷 田代道彌
『小田原城とその城下』小田原市教育委員会 1990

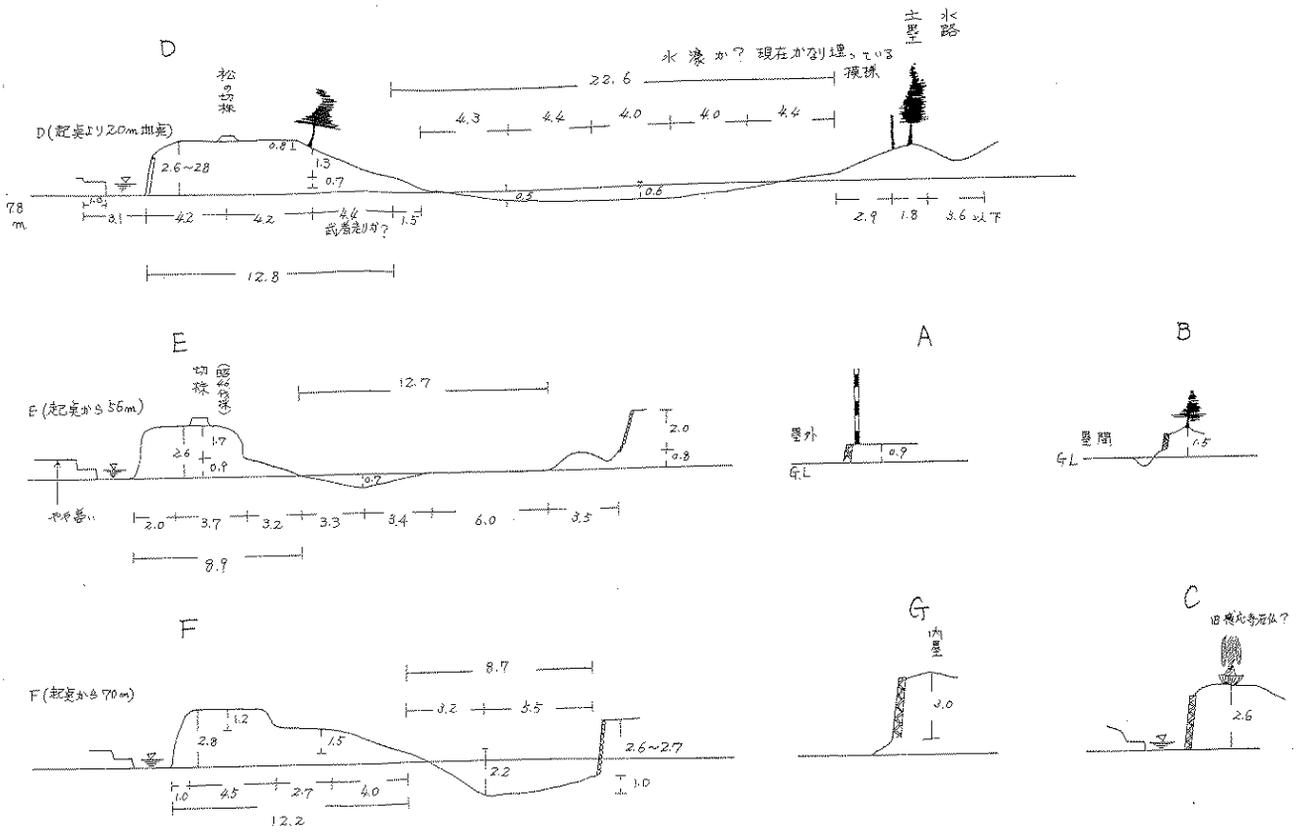
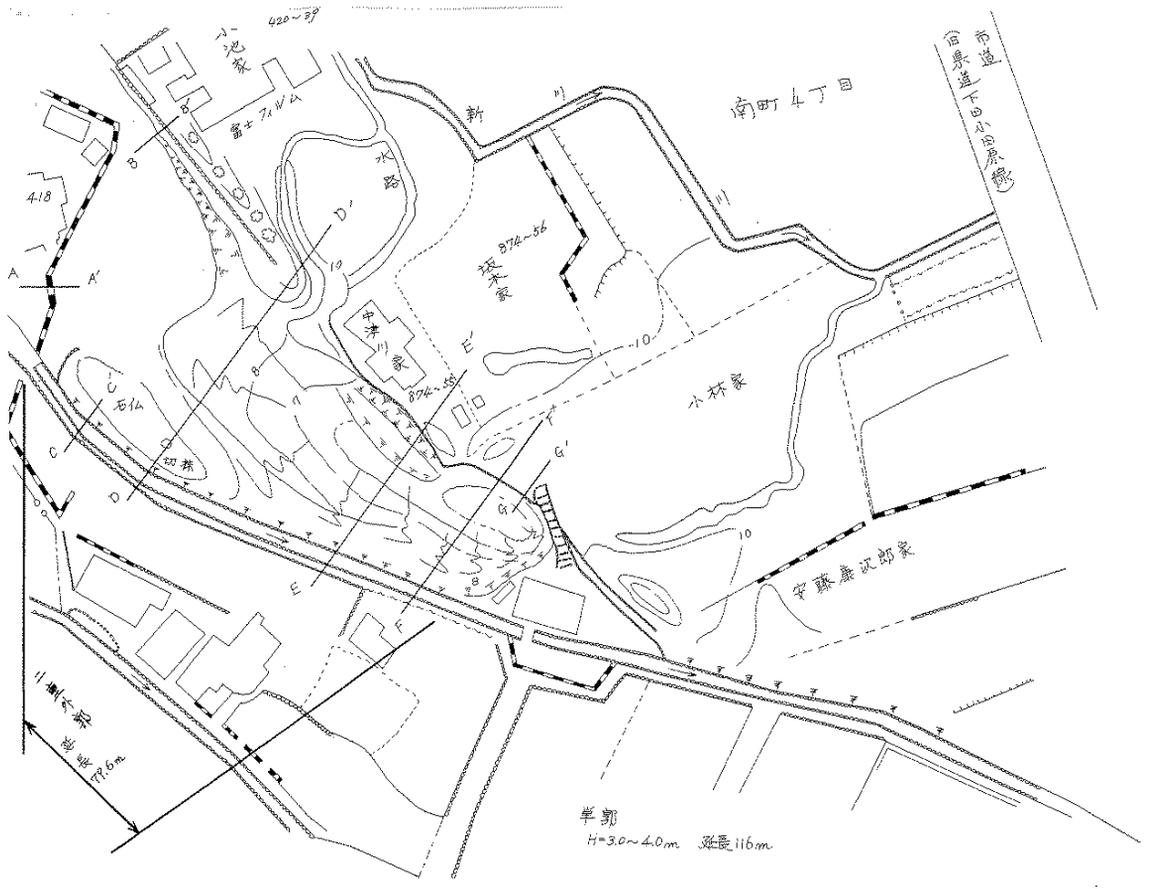


図8. 小田原城総構遺構図「早川口二重遺構」『史跡小田原城址保存管理計画策定報告書』
 小田原市教育委員会 1971 作図：小田原城郭研究会 難波明 山口隆

この遺構の下段は県立職業訓練校構内である。この中にも不明の遺構が散在しているが、その詳細はまだ不明である。いわゆる板橋口（上方口）は現在板橋見付付近に比定されているが、小田原城外郭はその構成から考えてそのような位置に虎口を認めることは困難で、職業訓練所構内一帯は今後検討されねばならない部分と思われる。空堀は低地では小田原用水北際まで存在し、鉄砲矢塙の空堀との段差は三メートルであったと言われる。

(二九) 板橋見附

この名称はもろろん江戸時代のもので後北条氏時代とは関係ないであろう。しかしここでは位置を示す便宜だけに用いた。見附地形は板橋旧道の位置より南へ国道を横断してその南際までを占め、この位置より西方は約四メートルの高低差をもつて低い。見附道路に沿った形態で光円寺境内西側に高さ一・八メートルの土塁が残存している。この寺は国道拡幅のため著しく前面を削平され後退しているが、この土塁痕跡は公図を参照しても原地形の残存であることが確認される。一般にこの付近が後北条氏時代板橋口（上方口）と考えられているが、地形的にはかなりうたがわしい。

(三〇) 早川口二重遺構

小田原城総構の「早川口遺構」に比定されており、また通称もそうなりつつあるが、しばらく慎重を期して標題のように呼んでおく。旧妙光寺の台地より旧感応寺まで、北より東にかけて比高三メートルほどの小丘がとりまき、西より南へ小田原用水の分流を導き、その結果構成される長三角形の凹部が主体である。分流沿いに長軸は七九・六メートル、北部が幅広く約四〇メートルほどで、虎口らしい地形が南端にあつてその部分のたけ分流の外側に突出する。分流に沿って土塁の痕跡があり幅は約一二メートル、高さ二・六×二・八メートル、南方では土塁敷は次第にやせて約六メートルになる。

東側の丘状部との移行は石積みが施されて原状は利明しないが、北部に一箇所それを欠く部分があり、小丘の中途に空堀らしい形跡がある。この小丘と分流沿い土塁との間の凹部はかなり低湿で、その状態から水濠の可能性も考えられるが、東西両端に遺構があり、南端の虎口形態も諸城下絵図や現況にまで表現されていることから、ここに小田原城外郭の低地の虎口を想定する可能性は、もっと検討されねばならない。

(三一) 小田原三台場

御台場と言えば、現代では東京の臨海副都心を思い起こすが、本来は幕末の異国船に対する海防の砲台を意味する。戦国時代の総構の遺構ではないが、ここでは幕末における小田原城遺構の一部として紹介したい。江戸末期、ロシア船来航事件が起こると、幕府は蝦夷地を直轄領として、文化四（一八〇六）年、ロシア船の打払い令を發布する。そして小田原藩では百姓一揆などの鎮圧も含めて非常時の浦固めとして土肥筋（湯河原町）、小田原浦、領境の羽根尾村、根府川関所などへの出兵が科せられた。

文化十四（一八一七）年、伊豆大島沖にイギリス船が現れると、根府川関所と土肥筋に一番手が出陣し、これが小田原藩として最初の浦固めとなった。文政三（一八二〇）年から非常時の際に小田原藩は相模の国の警備として浦賀奉行所を川越藩とともに援助することになった。そしてその翌々年の文政五（一八二二）年には浦賀にイギリスの捕鯨船が来航し、小田原藩より四百十二人の兵と十七隻の船を動員している。

清国がアヘン戦争で敗れると幕府の緊張感も増し、弘化元（一八四四）年、小田原藩は幕府より相模伊豆の二カ国の海防の命を受け、小田原藩主大久保忠愨は葦山代官江川英龍へ台場の築造を依頼、名門江川家の当主は代々太郎左衛門を名乗っており、自らを胆庵（たんあん）と号した英龍は西洋事情や高島流砲術を学び西洋砲術塾「葦山塾」を開校、海軍の創設や反射炉の建設、農兵の必要性など海防論を既に説いていた。

小田原藩から松国弥八郎、別府信次郎、深水程右衛門の三名の藩士が『葦山塾』に入門。嘉永二（一八四九）年三月、この三人の小田原藩士は免許皆伝を受けている。その年の閏四月にはイギリスの測量船マリナー号が下田沖を通過、小田原藩から二九一人の援兵が送り込まれたといったことも起きている。翌年嘉永三（一八五〇）年、三人の小田原藩士は海上より荒久、代官町、万町の三箇所を選定し、台場築造を開始している。並行して多数の大砲が造られ全三十二門のうち二十八門を小田原藩、残り四門を江川家に鑄造を依頼し、嘉永五（一八五二）年十一月に晴れて三基の小田原台場が竣工した。

翌嘉永六（一八五三）年、老中阿部正弘の命を受けた英龍は品川台場の着工に取り掛かっている。

小田原藩は領内の警備地域、浦固（うらがため）として、代官町台場を軸とした三台場詰、小田原浦固、真鶴岬固急手、大磯照ヶ崎固急手、土肥筋・東筋浦固、根府川関所固の計八箇所を選定している。

台場の規模としては、文久図に縦四十間・横六十間と記されており、縦七十二、横一〇八メートルにも及ぶ規模であった。安政六（一八五

九)年と推定される砲台寸法書下書(小田原有信会文庫 小田原市立図書館蔵)には、大塁の長さ六十六間余り(約百十九メートル)、堀の長さ七十九間(一四二メートル)、堡障堤の長さ一二七間(二二八メートル)、堡障堤の内側に三角形の陵堡を大十三、小十二の計二十五を交互に配置したと記されている。

『当浦御台場并浜畑町間見取絵図』(小田原市立図書館蔵)という安政六(一八五九)年四月二十六日に行なわれた小田原海岸での高島砲術の訓練の様を描いた絵図面では、荒久台場と万町台場が七門、代官町台場が八門の備砲を備えていた様子が描かれている。

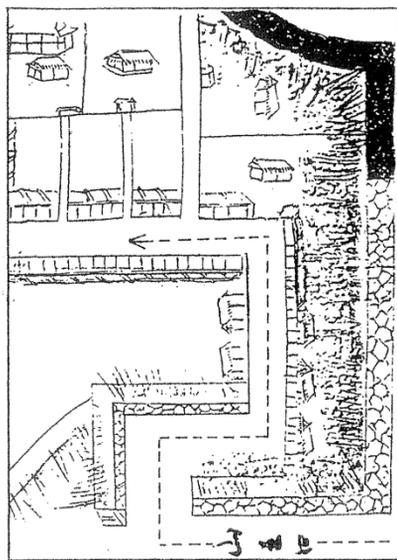
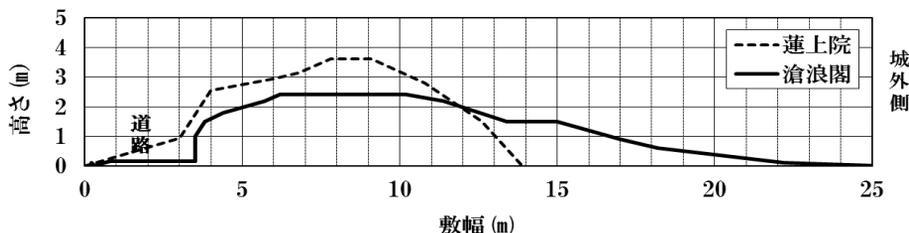
(三二) 滄浪閣土塁

滄浪閣は初代内閣総理大臣伊藤博文の別邸として一般には大磯の滄浪閣が有名だが、小田原の滄浪閣はそれよりも六年も早く明治二十三(一八九〇)年に造られた。明治二十七(一八九四)年に穂積陳重、富井雅章、梅謙次郎の三名の法学博士らによって、民法が練られ民法起草の地と知られている。明治二十九(一八九六)年、滄浪閣が大磯へ移転すると建物は伊藤の側近である金子賢太郎に引き継がれ、リゾート旅館として名称を「養生館」と改称する。しかし、明治三十五(一九〇二)年に訪れた「小田原大海嘯」によって大破する。

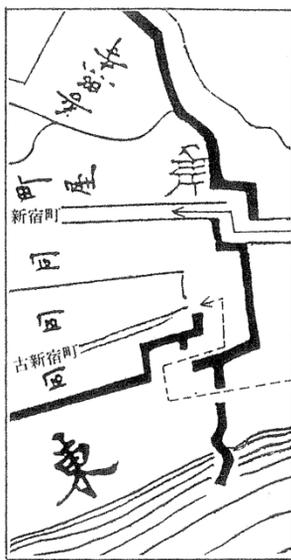
現在はその殆どを宅地として開発されてしまったが、僅かながらその垣根の土壇が残されている。その上に伊藤像が建つが、土地所有者のご厚意により見学が許されているが、この土壇は小田原城総構の土塁である。現況で総延長二十・五メートル、高さ二・四メートル、式幅約二十三メートルを測り、海岸土塁では最も保存状態が良い。連上院土塁と比較すると高さでは蓮上院土塁には及ばないものの、土塁に使用した土砂はほぼ同じ、あるいは滄浪閣土塁の方が多いたことがわかる。また、滄浪閣の規模そのものが西に五十一メートルも延長されていたことも判明している。

図9. 滄浪閣土塁と蓮上院土塁の断面の比較

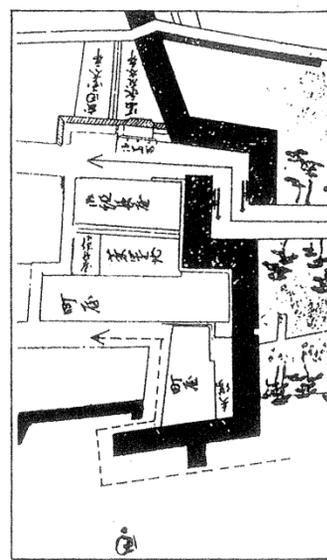
H24.10.8 大木・山口・山本



I 北条氏時代の遺構(加藤図)
古新宿町が東海道で、城の入口は北条稻荷付近。



II 新しく開かれた山王口(田辺図)
稲葉氏時代に新設された。



III 木戸門と番所(嘉永図)

図10. 江戸口見附の変遷 田代道彌
『小田原城とその城下』小田原市教育委員会 1990

(三三) 北条氏時代『山王口』と古新宿町

現在の古新宿町の東端に位置した。北条稻荷の前でそれまで東進してきた街道は急に反転し、海岸の砂丘に登って二度左折しながら山王川河口に向かった。江戸時代初期に徳川家康が五街道に設置した「一里塚」も、この砂丘上の先端に置かれていた。つまり北条氏時代後期の東海道は、ここ古新宿を通過していて、当時のこの地の町名は新宿であった。この一帯には鍛冶職が多く住んでいて、北条氏が彼らに発給した文書には新宿の名があるが、それは江戸時代の新宿のことではない。その後この地の鍛冶職は武器の製作から鍋釜に転職し、この地の一角に鍋町の名を残している。

(三四) 『江戸口』と新宿町

前期大久保氏時代が過ぎてしばらく経て、稲葉氏の時代の寛永頃(二六三三前後)、現在の新宿町東外れから山王川付近迄の一带に広く展開していた沼沢地の中に、一条の土橋を建設してその橋脚の位置に新しく『江戸口』を開いた。

これは後に江戸口見附とも呼ばれることになる。この工事計画は小田原城天守閣の改築はじめ御成道の新設など広範な一連の城の近世化工事に含まれていたらしく、これに続く三代將軍家光の上洛計画と無関係ではなかったと思われる。

新しい江戸口門の建設に伴って、その内側の沿道に新宿が構成された。そこで新旧二つの新宿が並立する結果になり、そのためこれを区別して前者には「古」を冠したのであろう。

(三五) 蓮上院土塁

この遺構は小田原城外郭のうち平地部に残存する貴重な部分で、史跡指定地でもある。区域としては新玉小学校東より蓮上院東まで延長一〇〇メートルほどの土塁として残存し、土塁に沿って渋取川が流れている。

土塁の中央部は東西七メートル、南北一五メートルほどの範囲が土塁主軸より西方に移動し、渋取川との間に、この部分だけ梯形の空地を生ずる。土塁の高さは北部では渋取川河底より頂部まで六・三メートル、内側からは三メートル、南部では渋取川河底より高さ四メートル、内側では一・八メートルを測る。

土塁敷幅は北部では約七メートル、主軸の移動する部分では六メートル、南部では崩壊があるらしく九・二メートルを測る。

北部土塁では頂部内側に武者走り状の平坦部があり、この幅は四メートル、頂部外側とは〇・五メートル低いので、したがって外側には小土塁状の隆起が残存する。

主軸移動部の南端より南へ二〇メートルほどの範囲の土塁は内側が約二分の一幅ほど削られている。

なお外側を流れる渋取川は、小田原城外郭に付属するかなり人工的な分流と考えられる可能性があり、西部外郭の小田原用水の分流に対応するものらしいが、最近この水路が暗渠に改修されて土塁と分流との立体的な構成の観察が不能になりつつある。

(三六) 『渋取口』承地

天正一八年(一五九〇)秀吉軍の来攻に備えて構築された小田原城外郭は、「めぐり三里」(二二キロメートル)と言うほどに巨大なものであった。そしてその内城東の低湿地に面しては高い土塁の外側に流水を導いて、泥水による要害の効果をさらに増幅させているように観察される。

江戸時代稲葉氏の治世に、大外郭外側の帯状に狭長なこの低湿地に新田開発が企図され、それ以来現在まで「渋取」と呼ばれる地域は極めて細長い。さらに北条氏時代にはこの外郭の一角に『渋取口』なる城門が存在したと伝えるが、現在遺構は検出されていない。ただ天保頃(一八四〇前後)には次の伝承があった。

一、大新馬場(地名) 高室仁兵屋舗ノ東南ノ土手ヨリ切石ヲ多ク鑿リ出ス。金渋取渡リ櫓ノ石垣ノ石成ヘシ。渋取表通りノ石垣ハ元禄ノ頃今ノ山王ノ社頭ノ石垣ニ用フ。尚、山王ノ社ノ下ニ記ス。又、此屋舗ニ渋取稲荷ト言フ古キ小祠アリ。寛政ノ頃迄ハ天正ノ棟札有シヲ今ハ何レエ力紛失シテ見エズ。」

(『相中雜誌 仁』)

一、渋取口 一名竹ノ花口 小田大新馬場ト中島村トノ境ニ旧跡有り。元禄ノ頃迄ハ矢倉台ノ石垣モ其儘有リシヲ、如何成故力今ハ芦子川ノ往還側ノ山王社ノ石垣ニ成ト云々。」

(『相中雜誌 智』)

【出典】

田代道彌 史跡小田原城址保存管理計画策定報告書 一九七六年

小田原市教育委員会

一部山本篤志加筆

【参考文献】

『品川御台場―幕末期江戸湾防備の拠点―』二〇一一年 品川歴史館

小笠原清『小田原市郷土文化館研究報告No.50』

滄浪閣土塁の現況報告 二〇一四

【編集】 大外郭の会 山本篤志